

第 14 回

浜松市芸術祭

演劇部門

主催◇浜松市教育委員会

時◇昭和43年11月17日

所◇浜松市民会館



— プ ロ グ ラ ム —

劇団だるま ☆ 天使が二人天降る

放送劇団 ☆ 瓜子姫とアマンジャク

国鉄・いずみ 合同 ☆ 濁流

劇団からっかぜ ☆ ピカの蔭から

「天使が二人天降る」

ギョクンター・バイゼンボルン作

加藤 衛 訳

劇団だるま

▼スタッフ

製作 古賀昭隆

舞台監督 古橋博征

演出 笹田紀子

装置 土師健司

照明 池沼和彦

▼人物

アラ 小池良枝

マア 鶴見智子

ギール 古橋博征

モムメ 古賀昭隆

の目には、デコボコだらけの、おかしな（星（地球）がうつります。

さあ、いよいよ開始です。穴居民族における愛情とは——研究の結果を宇宙の母たちに報告しなければなりません。二人の天使が知った愛、そして愛のうしろには何がかくれているのでしょうか？ みなさん、月のうさぎになったつもりで、私達の住む丸くて青い地球を、土星の輪にまたがって、ながめてみましょう。

地球を去って行く宇宙船から、マアが私達に教えてくれました。「私達の住む星がどんなに良い所かわかってもらえれば、あなた達の地球も違ったふうになり直せるでしょう。憎悪も不安もないよう、勇気を持ってば、平和への勇気を持ってば、可能なことです」
太つちよモムメ、かっこいいギール、可愛いアンネ、組長ギール、ブン屋ヴァルト……

みんなで考え、見なおして、新しい地球をつくりたいものですね。
——おしまい——

ピツシア 岩崎龍太郎

アンネ 笹田紀子

ヴァルト 池沼和彦

▼ものがたり

さて、ここは、ドイツの片田舎

ビール好きの、モムメとピツシアたちの歌声が聞こえてきました。

俺たちチャレールの紳士方

アンネが線路工夫たちのところへあらわれました。

「私、床屋なの」「おいしいスープも作れるわ」。

アンネの作る、スープのにおいが、おなかの虫を泣かせます。

そんな所へ、ふしぎな、ふしぎな訪問客。「愛情って何ですか?」。愛情の研究にやって来た、アラ

マア、二人の美しい宇宙人。「なぜピストルから小さな花を打ち出さないの?」「穴居民族は、自分のためにはりこうでも、ちっとも／＼考えない。ほかの人のことは」。理性しか持ち合せのない、彼女達

▼わたしたちの劇団

今を去る十年前、火鉢を囲んで話し合った演劇青年たち。そして今、十年後、彼らの多くはいない。しかし、彼ら先輩の意志を継いだ若い仲間が、火鉢を囲みながら演劇創造に汗を流している。初舞台の彼女と今年で二度目の彼は……今ここに、あなたたちに向かつて舞台上立っている。

地方文化のため、など考えなかった昨年。今日は違う。微力な彼は一生懸命に演っている、文化の炎を燃やすため……。

彼らの仲間は十人たらず、もっともつとその仲間をほしがっている、街角で、喫茶店で誘う、僕たちと一緒に演劇を創りましょうと。誘われなかった、あなた、君に、この紙面で誘いたい。「一緒に演劇やらないか」と。

劇団だるま。稽古場、成子町法林寺(ヤマヤ醤油うら)。連絡先、浜松市和地山二丁目六の一六 古賀昭隆方 あなたの顔が私達の前に現われるのを待っている。では又ね。

瓜子姫とアマンジャク

作 木下順二

浜松放送劇団

▼スタッフ

製作 村越一哲

演出 岡本和孝

舞台監督 水村春江

装置 水村春江・小栗雅・中村昂平・坂本薫・桑田茂三

照明 齊藤千春・柴田みどり・砂子まり子

効果 村松勇・小松時枝・長野節子

衣裳、小道具 日名子久美子

▼キャスト

瓜子姫 江口美子

私達は、自然を愛し、美を求める瓜子姫の心に触れた時、幼なかつた昔の純な自分を懐かしむことができるのです。それと一しよに、アマンジャクに、いじめられた後でも、なお呼びかけたくなる瓜子姫の気持を、温かく理解してやることができます。ともあれ、私達は眼を引き込むような秋空の美しさに魅せられ、子供の絵本に見るような、かわいらしい瓜子姫、そして忘れられないワンバク小僧のアマンジャクの声に誘われて、一步一步民話のムードに包まれてしまいました。

この芝居を見られる皆様もきつとこのムードの中で、民話独得の土の香にひたり、しばし幼ない日の思い出に胸をふくらませることができましょう。そして、いつの日か高い丘に立って、声の限り、アマンジャクを呼んでいる自分の姿を夢見ていただきたいものです。

▼ 私達の劇団もとうとう創立二十周年を迎えました。長いような、短かいような、歩みの中で、私達は全

アマンジャク 鈴木利枝

じっさ 山下秀光

ばっさ 鈴木多見子

ソマの権六 吉田満

トンビ 長野節子

カラス 坂本薫

ニワトリ 日名子久美子

▼記

昔々、山あいの小さな村に、瓜から生まれた、けがれを知らぬ瓜子姫という乙女が住んでいました。

さて、この瓜子姫は、来る日も来る日も、毎日朝から美しい布を織っているのです。育ての親のぼつさは、「何をするよりはた織りが好きだに」と言うのですが、案外瓜子姫は美しいものに憧がれ、美しいものを創り出すことへの喜びを求め続けているのかも知れません。——それとも、彼女は孤独をまぎらし、淋しさに打ち勝つためにはたを織り続けているのでしょうか？

ての情熱を芝居作りに向けて来ました。その間に来り、そして去った数多くの、本当に数多くの仲間達の事が胸に残ります。或は永遠に帰らぬ旅路に、或はこの浜松を遠く離れ、また考えを異にして他の道を行くことになった仲間達、今こそ、私達はこの人達、先人達の進み拓いた道を省み、更に一步一步を強く高らかに踏み締め、踏み鳴らしつつ前進しなければならぬと、決心するのです。

▼

舞台装置を作っているグループから「どうしてわが劇団にはこんな男の子が少ないのかしら？」現在男性十名、その中で装置作りに動員できる男性三人、他の劇団にくらべると決して少ないとも思えないのですが「なにしろ家庭を持つといろいろくとね、」とは男性の本音でしょうか？

しかし、独身の男性はたしかに減少の一途をたどる近頃です、「やって来い！ まだ独身の男の子」これが私達の真実の声であります。

濁流 作 国吉 優

劇団 いづみ

国鉄演劇部

▼ スタッフ

演出 国吉 優

舞台監督 牧野照彦

舞台装置 橋本絃司

衣裳 鈴木三千代・太田喜雄

照明 高橋賢次・松本直

効果 青山省一・尾崎知司

大道具 小の田勝春・布施佑一郎

小道具 井ノ口恭義・早川幸夫

演劇指導 安間正夫

▼ キャスト

芥藤作造 末永健

いと 浅野かつ子

余りにも不道義的な非理論的は考え方（これは間違った考えだろう）しかし乍らその感情の中に含まれた複雑な背景は、一言にはぬぐい切れない問題であることも又論を待たない。私はその点をみつめ日本人がタブーとしている朝鮮人問題を取り上げた。

▼ こんにちは いづみです

劇団いづみが結成されて十周年 細く長く続いた演劇団体。何んと長い事つゞいてきたことか。そして何んと実のない活動をつゞけて来たことか。深く反省すること多かりき。

山のあなたの空遠く、演劇の無限性を求めて吾々は往く。しかし乍ら現実のきびしさ、つらさ苦しき。なんとツライ事か。その中にあるさゝやかな楽しみ。皆さん今後共よろしく。トンカチをふるって大工に自信のある方。電気のことなら俺に委せろという人。泥絵具をぬりたくる人。衣裳のきになるステキな娘さん。舞台に立って大声でドナリたい人 お待ちしています。

和夫 山本和雄

京子 鈴木美枝子

節子 中村正子

▼ あらすじにかえて

現在、結婚は法律に定められた年令に達すれば双方の合意にもつき自由に結婚する事が認められている。だが他方日本の家族形態に於いて家長制度—いわゆる長子がその家となりを守りひいては親の扶養を義務づけられる因習により、偶然その対象となる男女は家柄、財産等々結婚の条件がいづれも人意的に作りあげられその為の悲喜劇が現実上演じられ今もつゞいてる。

その善悪はともあれ……濁流はその類に属する戯作である。しかしこの作品は息子の結婚相手が朝鮮人であったという突発的な出来事を描出して親と子の結婚観を考えてみた。やがては一人息子に面倒を見てもらわなくてはならぬ親がその事態に遭遇した時の反応。日本人が彼らにもっている観念的な感情。

▼ 国鉄浜松工場演劇部

今静かに反省してみますと「平凡」と言うことばが若しここでゆるされるならば「大過なく芝居の道をあゆんできたもの」といえるでしょう。思えば早いもので敗戦という歴史的な中から立って二十三年ともかくにも芝居を通じ乍ら少しでも明るい世の中をと……

「父帰る」「馬のいる家族」「祝い日」「三年寝太郎」「鏡草子」「死神やらい」「この小児」「さつば夜話」「屋上の狂人」等多くの戯曲と今日まで共共してきましたがまだく満足出来得るもの満足していただくものはありません。

さてこの第十四回芸術祭には単独出演を考えていろいろと努力をしてまいりましたが女優さんの都合等ありまして単独参加が出来得なくなりここに劇団いづみの方々の暖い力添え御支援をいただきました私達劇団の名を皆々様の前に発表することになりました。皆さん、どうぞ旧に倍しての御支援、御協力を御願ひ申し上げます。

連絡先 東伊場二丁目十三ノ五 牧野照彦

ピカの蔭から

作・南部文化戦線創作
委員会集団創作

劇団からっかぜ

この戯曲は、東京の南部文化戦線創作委員会の三人のメンバー（小関智弘、荒井敬亮、大垣肇）が共同で仕上げ、昨年七月末に劇団労芸が上演して好評をかちえたものである。

▼スタッフ

演出 船水一

演出助手 岡部あや子

舞台監督 野村進一

装置

小道具

照明

効果

衣装

劇団からっかぜ
舞台美術部

上る「いわお」……………

二十三年間、それも苦しみ続けている被爆者の現実と、原爆を使おうとしている者がいる現実とを、ともに考えていこう、とこの作品をとりあげました。

▼劇団からっかぜ

第五期生募集中

こんにちは、みなさん、劇団からっかぜです。まあ、演劇というとむずかしいもの、観るのはいいがやるのはとおくになりがちです。

これは、一部を除いて、現在の小、中学校では、演劇を正課の授業として、あるいは重視していない関係から演劇の魅力がほんとうにみんなに知らされていないということからくるものではないかと思えます。ほんとうは誰にも出来る素晴らしいものです。

からっかぜの仲間たちは、みんな演劇の魅力にとりつかれています。味けない毎日であって、それは創造性をとりもどす魅力であり、信じあえぬ人間関係にあって、それは熱い心と心をぶっつけ合う魅力

▼ キャスト

西川いわお 水谷陽一

直子 平間澄江

吉野 今田順三

後藤 河原崎正志

管理人 竹島みちよ

おばさん 沢 とよ子

今井 野村進一

▼ あらすじ

この物語は、昭和20年8月6日原爆投下によって二十数万の犠牲者を出した広島にろうじて生き残った二人の兄妹を中心にした物語である。

一両親を戦争で奪われ二人で生きてきた二十三年間の苦しい生活——就職や結婚の差別で東京へ逃げるようにしてきたのだが…… 被爆したことを自分自身の罪であるかのように苦しみ続けなければならぬ毎日…… 原爆症による交通事故をきっかけにして、苦しみを怒りにかえて生きようとして立ち

であり、働くものの誇りにめざめ、働くものの生活と斗いをうたいあげる魅力です。

……その場に、どうぞ あなたのエネルギーを！

……その場に、どうぞ あなたの青春を！

……その場に、かけ込んで いますぐ！

— 連絡先 —

ケイコ場 長崎屋前 玄忠寺幼稚園

ケイコ日 水・土曜日 6時30分より

事務局 浜松市板屋町三一五

劇団からつかぜ事務局